

発達障害治療における愛着形成のもつ意味

小林 隆 児

Abstract : The meaning of attachment formation is discussed in terms of treatment of developmental disorders and autism in particular, and the following points were raised: 1) Difficulties in attachment formation arising from the vicious circle of approach-avoidance motivational conflict exist for most all children with developmental disorders. 2) There is an intimate association between perception and feelings of security. 3) The characteristics of amodal perception peculiar to autism indicate a deep interrelationship between perception, emotion, and attachment. 4) Primitive communication between two designated parties is dependent upon exchange on the affective level. 5) The meaning of speech and behavior is principally context dependent. 6) Thus, object perception by the child is strongly stipulated by how the caregiver mirrors back the perceived intent behind their child's behavior. Lastly, the deep association between perception by children with developmental disorders and attachment is illustrated through some clinical examples.

Jpn. J. Med. Psychol. Study Infants, 10 (1): 29-34, 2001

Key words : affective communication, amodal perception, approach-avoidance motivational conflict, autism, security

はじめに

今日、発達障害は脳の機能障害に起因する病態であると一般に考えられています。このよう

な考え方は、ややもすると発達障害を有する子ども達の発達の様相を脳障害とあまりにも強く関連づける傾向をもたらし、子ども達の社会情緒的側面が見過ごされやすい危険性をはらんでいます。今日のわが国における発達障害への治療があまりにも言語認知面の能力に偏りすぎていることは否めない事実でしょう。本稿では、情緒社会的発達と言語認知的発達の関連性に焦点を当てながら、なぜ筆者が発達障害の問題を、個体能力障害ではなく関係障害の視点に立って捉える必要があるかを論じてみようと思います。ここでは、筆者が主に取り組んでいる自閉症を

The Significance of Attachment in the Treatment of Developmental Disorders

*東海大学健康科学部社会福祉学科

(〒259-1193 神奈川県伊勢原市望星台)

Ryuji Kobayashi: Department of Social Work, Tokai University School of Health Sciences, Bohseidai, Isehara, Kanagawa 259-1193, Japan.

対象にしながら、とくに愛着形成の問題が自閉症の成因や治療を考える上でいかに重要であるかに焦点を当てることにします。

自閉症と愛着

1. 自閉症と愛着形成障害

自閉症に見られる愛着についてはこれまでもいくつかの研究があります。そこでは自閉症児にも安定した愛着パターンを示すものが少なからず存在するということが分かっています。自閉症児は養育者との間で愛着形成は困難であると考えられていますが、自閉症児に見られる愛着行動と愛着形成との関連をどのように考えたらいいか問題となります。

2. 愛着行動と接近・回避動因的葛藤

自閉症の子どもに見られる愛着行動を巡る問題については、Richerの研究が参考になります。彼は動物行動学と愛着理論の立場から、自閉症児に見られる愛着行動には、強い接近・回避動因的葛藤の存在を指摘しています。自閉症児に愛着行動は認められるけれども、愛着関係については非常に葛藤的であるがために、容易には愛着形成を達成することが困難になるというわけです。

接近・回避動因的葛藤とは、元来非常に過敏で不安を抱きやすい子どもにおいて、親との間の距離が遠くなると、接近欲求が高まりますが、あまりに近くなると、逆に回避欲求が高まってしまい、養育者との間で親密な愛着関係が形成されません。接近欲求と回避欲求がともに強まって葛藤的になると、子どもに激しいパニックが生じます。パニックを起こす距離とは、日常的に私たちが他者と会話する際の物理的距離を指しています。

そのため悪循環が両者（母子）の間に生じてしまいます。つまり、不安を起こして接近行動を起こした子どもに対して親は手をさしのべて抱きかかえようとしますが、すると途端に子どもは回避的になってしまいます。親はそのような子どもを見ると、自分を拒否していると感じ

取って放っておくか、遠ざかってしまいます。そうすると、子どもは再び不安を起こして接近行動を示すようになるわけです。その後は同じ事のくりかえしとなります。このようにして親子の間に好ましい愛着関係が育たないことになります。

愛着と知覚

1. 愛着はなぜ大切か

次に愛着と知覚の関係を見てみましょう。愛着はなぜ大切なのでしょう。愛着形成が育まれると、子どもと親の間には安全感 security が生まれます。この安全感の有無が子どもの知覚のあり方にどのような影響を及ぼすかを考えてみましょう。

2. 安全感と知覚

安全感の乏しい状態にある自閉症の子どもを想像してみましょう。彼らは自己感が萎縮して、びくびくして不安に圧倒されているような状態にあると筆者は想像しています。こんな状態であれば、あらゆる外界の刺激は当事者にとっては脅威的に映りましょう。それに比べて、健康な子どもや治療によって安全感が育まれていった状態であれば自己感は拡張して外界の刺激は子どもにとって好奇心をそそるほどに快適なものに映るようになります。安全感の有無により、知覚のあり方はこのように劇的に変容します。

3. 知覚変容現象

このような知覚の変容を筆者は知覚変容現象（小林，1999）として概念化しました。安全感のなさによって外界の刺激は脅威的に映るといえますが、その後、経験的に分かってきたことは、愛着対象が急速に失われたり、不安が急速に強まったりしたときに限らず、不安な状態から急速に愛着形成が育まれていくという好ましい変化が起こるときにも、知覚変容現象をもたらしやすいことです。

自閉症と無様式知覚

1. 自閉症と無様式知覚

知覚変容現象をもたらす大きな要因として、自閉症に見られる独特な知覚様態としての無様式知覚の存在があります。これまで筆者が自閉症に見られる独特な知覚様態についていくつか報告してきました。相貌的知覚 physiognomic perception (Werner) と力動感 vitality affects (Stern) の存在です。

無様式知覚とは、あらゆる刺激の持つ動きの変化を敏感に察知し、相貌的に感じ取るという特徴を持っています。ここで忘れてならない重要なことは、このような知覚体験において、必ず快か不快、おもしろい、恐ろしいなどといった情動がゆさぶられるという体験を同時に併せ持つことです。

ここで情動と知覚という生物学的色彩の強い現象が、愛着という対人関係に関連した社会情緒的現象と深くつながっていることが推測されます。

無様式知覚と母親参照

子どもは心細くなったときに母親参照機能を働かせることによって初めて心の安定を得ていますが、それは無様式知覚という独特な知覚様態があって初めて可能になっていることができます。母親の醸し出す力動感に感応することによって、安全か否かを判断することが可能になり、子どもにとっての環境世界の意味を次第に体得していくこととなります。このような母子コミュニケーションの世界における知覚は、独特な未分化ないし原始的な段階のもので、乳幼児期初期の母子コミュニケーションは、このように未分化な知覚機能と密接につながっています。

未分化な知覚と 母子コミュニケーション

これまでコミュニケーションの二重構造とし

ての、情動的コミュニケーションの重要性を筆者は主張してきましたが、情動的コミュニケーションとはまさにこうした未分化な知覚様態が主に働く独特な世界なのです。特定の二者、すなわち母子間のコミュニケーションは、情動水準のコミュニケーションに強く依存しているということが出来ます。

わかりやすく図示すると、図1のようになります。横軸にコミュニケーション水準を、縦軸にコミュニケーションの広がりを示しています。コミュニケーションの初期段階としての特定二者関係では、より情動水準に依存していますから、図1では左下の方に位置し、無様式知覚という未分化な知覚機能が主に働くこととなります。その反対に、コミュニケーションの相手が不特定多数の広がりを示すと、コミュニケーション水準は象徴性が高まり、知覚機能も高度に分化した視聴覚機能が主に働くこととなります。知覚機能の分化度とコミュニケーションの広がり、水準は密接に関連し合っていることが出来ます。

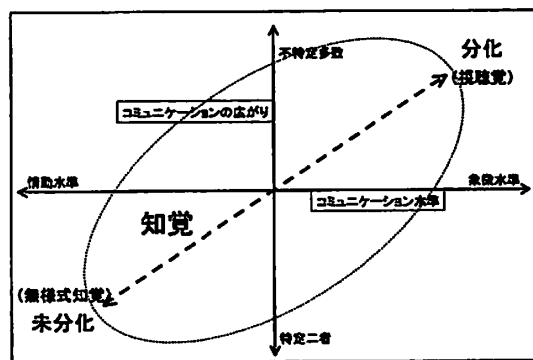


図1 コミュニケーション構造と知覚の分化

今、なぜ関係障害臨床か

1. 言語認知の問題は個体能力障害に帰着できるか

筆者は依って立つ基盤を関係障害臨床と称しています。今、なぜこのような主張をしているのか、根拠を述べてみましょう。ここではとく

に言語認知の問題が、従来のような子どもの脳機能の問題に起因するという個体能力障害に帰着できるかどうかをここでは論じてみたいと思います。

まず、二者間のコミュニケーションの構造を考えてみましょう。AとBのふたりの間で展開するコミュニケーションを例にとってみます。Aがなんらかの意図を持ち、ことばや行動でもってその意図をBに伝えようとします。しかし、Aの意図が実際に用いたことばや行動でもって十分に余すことなく表現することができるかといえば、できるはずはありません。自分の思いをことばで表現することの大変さは常日頃痛感しているところです。つまり、Aの意図と実際にAが用いることばや行動とのあいだには必ずなんらかのずれが生まれることになります。次にAの意図にそって用いられたことばや行動を受け止めて理解する側のBは、Bなりの受け止め方でもってAのことばや行動の意味をさぐり理解しようとします。ここにもAが用いたことばの意味合いがBによって受け止められる際にはなんらかのずれが起こることになります。さらには、ことばや行動は当事者のA、Bの思いとは別に第三者的な常識や通念としての意味合いも存在します。このように各々の間でなにかのずれが生じることが、実はコミュニケーションにおいては必然的なものとして認識することが大切になります。コミュニケーションにおいては当事者間でなんらかのずれが生まれることに必然性があるということになります。このことは、ことば・行動の意味は当事者の主観に依存することを意味します。

2. ことば・行動の意味は文脈依存的である

さらにことばを換えて言えば、ことば・行動の意味は文脈依存的であるということができません。具体的に言えば、ある子どもが発したことばや行動の意味を、当事者の主観やその場の状況などの要素を考慮せずに、一律客観的に捉えることなどできないことを意味しています。

このことを先の図1を用いて説明すると図2のようになります。特定二者間では話し言葉はより文脈に依存することになりますし、不特定多数の世界においては、話し言葉もより普遍性を持ったものになっていくことになります。

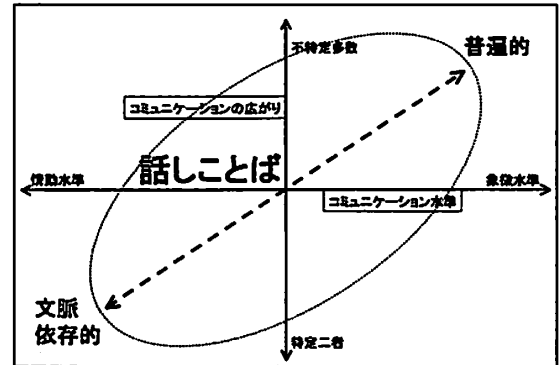


図2 コミュニケーション構造と話しことばの両義性

3. 行動を受け止める養育者の内的表象

ことば・行動の意味が文脈依存的であるということを見ると、ことばを発した子どもの主観（意図）のみならず、養育者側の主観を取り上げないわけにはいきません。養育者の内的表象の質を問題にする必然性があるというわけです。

ここで筆者らが実践している Mother-Infant Unit での体験例をお話しましょう。ある4歳自閉症男児の治療経過中に、半円形のブロックを二つ用いて重ね合わせてあるものを作って、さかんに母親に「ガーガー」とうれしそうな声を発しながら、母親に何かを言ってもらいたそうにしていました。筆者にはブロックを重ね合わせた形から、子どもがアヒルかガチョウを思い描いて母親にさかんに訴えかけていたことは容易に想像できました。

母親が通常のように育児に没頭できるような状態にあれば、「あら、かわいいわね、ガーガー、アヒルちゃんね」などと子どもの思いに適切に応答できます。このときの母親の知覚世界には、子どもと同様に、無様式知覚が活発に働いていることが分かります。子どもの示す世界に相貌

性を感じ取っているからこそ、このような対応が可能になっているのです。

しかし、母親に現実的な強い不安があると、先のような生き生きとした交流は生まれなくなります。たとえば、先の例では、母親は「また、ブロックをきちんと合わせるこだわりが始まったのかしら？」と子どもの行動を病的に捉えますます不安を強めています。治療開始前に、この子がブロックをこのように几帳面にきちんと合わせて重ねることに執着していたことがこのときの母親には想起されていたのです。現実的不安が強まったことによって、それまで生き生きと働いていた無様式知覚の世界が急速に失われてしまったのです。

さらに深刻な例として、母親自身の愛着表象に問題がある場合、つまりは愛着を軽視している養育者の関与があります。このときには、母親は「しっかりやっごらん。ひとりでもできるでしょ」などうれしさや心細さを分かち合ってもらいたい欲求から接近している子どもに対して、突き放すようにして自立を促す働きかけをしがちになります。

これらの例は、Lebovici のいう養育者が心に抱く三つの乳児像の特徴を示していると言えます。

4. 養育者の内的表象と映し返し

子どもが養育者の存在とその関与、つまり映し返し mirroring を通して自分を認識していくことを考えると、養育者が子どもの行動に対して抱く内的表象の質は、きわめて重要な役割を果たしていることが分かります。つまり子どもは、自らの体験の意味を養育者の内的表象を通して獲得するからなのです。

発達障害治療における 愛着形成の持つ意味

最後に発達障害治療における愛着形成の持つ意味を述べてみましょう。愛着形成と認知の関連を考えてみることにします。

ここに図3のようなある対象があるとします。

この対象にはさまざまな属性が備わっています。形、色、表面、触感、質感、材質、重さ、用途などなど、実に多様な属性があります。このように、本来対象の持つ属性は実に多様であるのです。

私たちはことばを気軽に用いていますが、ことばの獲得に困難さを持つ子どもに対して私たちが発することばは、その対象の認知のあり方を規定しているということを深く認識する必要があります。

図3の対象を、たとえば「コップ」と表現すると、この対象は主に「水を飲む時に使う道具」であるという属性に着目した認識の仕方が暗黙のうちに示されていることとなります。しかし、私たちが日常的に接している自閉症児はこの対象にどのような関心を向けるかを想像してみましょう。ある子どもは図4のような関心の向け方をしました。ぐっと接近してこの対象の光り輝くさまにうっとり魅入っている世界を想像できるでしょう。このときの子どもは、この対象のどのような属性に着目しているのでしょうか。表面の光り輝く様に魅入っています。どう考えても「コップ」という認識ではない世界です。このように対象の「意味」は着目する「属性」に依存しているのです。

したがって、私たちは、子どもの関心・興味の世界に沿ったことばかけ（映し返し mirroring）を行うことが大切であることが分かります。対象の「意味」は、けっして客観的で普遍性を持っているのではないのです。「いま、ここで」の状況、当事者の主観的世界などすべての要素を包含した文脈に強く依存しているということが言えます。

私たちは、これまで子どもの発達上の問題をあまりにも子どもの個体能力の問題に焦点化して考えてきたように思います。子どもの言語認知の問題は、けっして脳障害と短絡的につなげて考えることはできないでしょう。言語認知機能がどのようなプロセスを経て獲得されていくものか、現実の対人交流の緻密な観察と治療的

関与を通じた関係障害臨床という立場から、筆者がいま主張したいことは、私たち治療者、養育者の関与のあり方が深く関係していることの現実であります。これまでの自閉症研究の視点に、関係の質を論じるような理論的枠組みが、いかに乏しかったかを痛感します。関係障害臨床の意義は、けっして過去の環境因論の蒸し返しではなく、子どもの資質 nature と養育環境 nurture が現実にもどのように関連しあって発達展開していくのか、その実態を明らかにする可能性を秘めていることにあると筆者は考えています。

本稿は第10回日本乳幼児医学・心理学会(2000.12.2.筑波大学)のシンポジウム「愛着形成の発達病理」において発表した内容を一部加

筆修正したものです。当日発表の機会をあたえていただいた宮本信也会長にお礼申し上げます。本稿の詳細については小林(2000)で論じています。なお愛着形成の問題が自閉症においていかに深刻なものを残すかを小林(2001)でも論じています。

引用文献

- 小林隆児(1999). 自閉症の発達精神病理と治療. 岩崎学術出版社.
小林隆児(2000). 自閉症の関係障害臨床—母と子のあいだを治療する. ミネルヴァ書房.
小林隆児(2001). 自閉症と行動障害—関係障害臨床からの接近—. 岩崎学術出版社.



図3 ある対象『コップ』

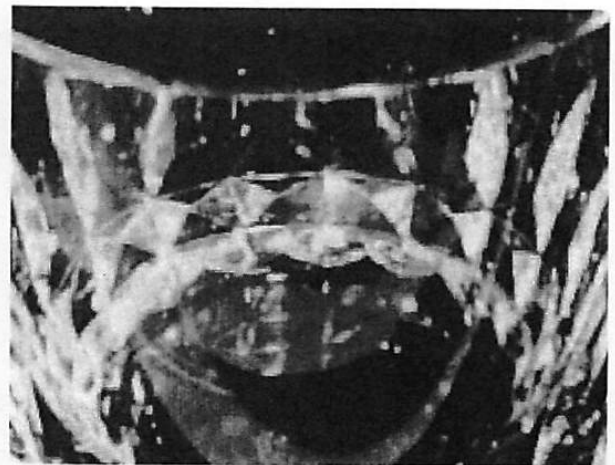


図4 光り輝くさまに魅入る世界